

第67回 東北地区高等学校PTA連合会 郡山大会報告書

「こころ豊かなたくましい人づくり」
～変化に対応し、未来を拓く力を～」



平成30年7月5日(木)・6日(金)

- 会 場 福島県産業交流館ビッグパレットふくしま・ホテルハマツ
主 催 東北地区高等学校PTA連合会
共 催 一般社団法人全国高等学校PTA連合会
後 援 福島県教育委員会 郡山市教育委員会 福島県高等学校長協会
公益財団法人日本教育公務員弘済会福島支部
主 管 福島県高等学校PTA連合会

目次

01	I	フォトギャラリー			
13	II	郡山大会を終えて	大会実行委員長	樽川	啓
14	III	郡山大会開催要項			
16		郡山大会次第			
	IV	開会行事			
18		オープニング	詩人	和合亮一	
19		あいさつ	郡山大会会長	石川直哉	
20			(一社)全国高P連会長	牧田和樹	
21		来賓祝辞	福島県副知事	鈴木正晃	
22			郡山市副市長	吉崎賢介	
23		受賞者代表謝辞	宮城県高P連顧問	霜山清	
24		大会スナップ			
	V	研究協議			
25		テーマ・発表者一覧			
26		発表要旨・質疑応答			
39		指導助言			
42		大会スナップ			
43	VI	講演 「スポーツの力」～子どもたちの未来に向かって～	筑波大学教授	山口香氏	
53	VII	閉会行事			
		次期開催県あいさつ	山形県高P連会長	細谷隆良	
		閉会宣言	大会実行委員長	樽川啓	
54	VIII	編集後記			



フォトギャラリー

第67回東北地区高等学校PTA連合会 郡山大会

平成30年7月5日(木)・6日(金)

会場 福島県産業交流館ビッグパレットふくしま
ホテルハマツ



情報交換会 7月5日(木) ホテルハマツ



大会実行委員長
樽川 啓



大会会長
石川 直哉



全国高P連理事(岩手県連会長)
渡辺 正和



福島県教育委員会教育長
鈴木 淳一



郡山市教育委員会教育総務部長
野崎 弘志



福島県高等学校長協会会長
阿部 武彦



大会副実行委員長
三瓶亜記子



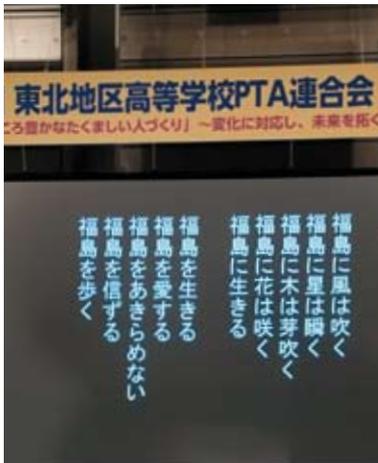
大会副実行委員長
伊藤 博之



第67回 東北地区高等学校PTA連合会
郡山大会情報交換会



開会行事 7月6日(金) 福島県産業交流館ビッグパレットふくしま



司会
渡邊 奈美



大会実行委員長
樽川 啓



大会会長
石川 直哉



(一社)全国高P連会長
牧田 和樹





福島県副知事
鈴木 正晃



郡山市副市長
吉崎 賢介



受賞者代表
霜山 清



広報紙コンクール最優秀賞
八戸工業大学第二高等学校



大会副実行委員長
高橋 晃



大会副実行委員長
鈴木 則夫

研究協議 「社会の変化に対応し、未来を切り拓く子どもたちの力を育むPTA活動」



青森県立板柳高等学校PTA会長
三戸 康正



秋田県立矢島高等学校PTA会長
松田 孝志



山形県立小国高等学校PTA会長
渡邊 重信



岩手県立北上翔南高等学校PTA副会長
高橋 カヨ子



福島県立喜多方桐桜高等学校PTA会長
中條 明美



宮城県志津川高等学校PTA会長
佐藤 信一



講演

筑波大学教授 山口 香氏 「スポーツの力」～子どもたちの未来に向かって～



高校生発表

福島県立郡山商業高等学校
チアリーディング部



福島県立塙工業高等学校
和太鼓部





郡山市高等学校合唱連盟・管弦楽団
(安積・安積黎明・郡山商業・郡山東・郡山・日本大学東北・郡山女子大学附属)



閉会行事

次期開催県あいさつ 山形県高等学校PTA連合会



閉会宣言 大会実行委員長 樽川 啓



大会スナップ(1)



大会スナップ(2)



郡山大会を終えて



第67回東北地区高等学校PTA連合会郡山大会

実行委員長

樽川 啓

第67回東北地区高等学校PTA連合会郡山大会は、平成30年7月5日(木)、6日(金)の2日間にわたり開催され、1,500名を超える参加者を得て、盛会のうちに終了することができました。ご多用のところご出席をいただきました来賓の皆さま、東北各県からご参加いただいた会員の皆さまに、実行委員会を代表して厚く御礼申し上げます。

本大会は、「こころ豊かなたくましい人づくり～変化に対応し、未来を拓く力を～」をテーマとして開催いたしました。

5日の情報交換会では、昨年、次期開催県挨拶でお約束しましたとおり、がくとくん、おんぷちゃんによる「がくとくんバンド」でお迎えし、あさか開成高校の「チームAloha」による素敵な笑顔が印象的なフラ・タヒチアンダンス、約300年前から伝わる高柴のひょっとこ踊り、藤田久実子様による会場と一体となったサックス演奏で盛り上げていただきました。参加された626名の皆さまが存分に語り、存分に飲み、交流している様子が印象的でした。

6日の大会は、本県教員であり詩人の和合亮一先生による力強い詩の朗読でのオープニング。研究協議では6県代表の方々より、特色あるPTA活動の発表がありました。お昼は郡山名物の『海苔のりべん』をご賞味いただき、郡山商業高校チアリーディング部の澆刺としたダンス、塙工業高校和太鼓部の迫力ある太鼓演奏をお届けしました。

午後の講演では、伝説の女子柔道家・山口香先生に、「スポーツの力～子どもたちの未来に向かって～」と題してお話をいただきました。「考えさせる環境を作る。いい質問をする。」というコーチングの要諦が心に響きました。

大会フィナーレは、楽都郡山が誇る市内7校390名の合唱・管弦楽を披露させていただきました。楽都郡山を体感いただきましたでしょうか。

今大会を終えて最も印象に残ったのは、子どもたちには素晴らしい可能性があるということでした。各研究発表や講演はいずれもそれを信じることを基調とし、高校生たちの発表はまさにそれを感じさせるもので、何より子どもたちの可能性を引き出すことのできる大人でありたいと思った次第です。

最後に、本大会の開催にあたりご支援ご協力をいただきました関係諸機関の皆さま、PTA会員の皆さまに改めて感謝を申し上げます。誠にありがとうございました。

第67回東北地区高等学校PTA連合会 郡山大会開催要項

- 1 期 日：平成30年7月5日(木)・6日(金)
- 2 会 場：福島県産業交流館ビッグパレットふくしま(大会、諸会議)
ホテルハマツ(情報交換会)
- 3 主 催：東北地区高等学校PTA連合会
- 4 共 催：一般社団法人全国高等学校PTA連合会
- 5 後 援：福島県教育委員会 郡山市教育委員会 福島県高等学校長協会
公益財団法人日本教育公務員弘済会福島支部
- 6 主 管：福島県高等学校PTA連合会

7 東北地区高P連大会開催目的

会員が相互に連携し、子どもたちの豊かな個性の伸長を図り、社会の進展に対して主体的に取り組むことができるたくましい高校生を育成するため、研修・研鑽を積み重ね、今後のPTA活動のさらなる充実発展に寄与する。

8 東北地区高P連大会開催方針

- (1) 保護者と教職員の生涯学習の場として、高校教育に関する建設的な意見交換を行う。
- (2) 高校生の健全育成に関する問題について討議し、今後のPTA活動を充実させる。
- (3) 家庭・学校・地域社会がともに手を取り、高校教育の諸問題に取り組む。
- (4) ネット社会におけるPTAの役割を認識し、モラルある情報社会の構築を目指す。

9 研究テーマ・スローガン

- (1) 豊かな心を持ち、たくましく生きる高校生を育成しよう。
- (2) 教育環境について理解を深め、改善に努めよう。
- (3) 高校生の学習意欲と学力の向上について考えよう。
- (4) 会員相互の研修を深め、自ら生涯学習を実践しよう。

10 郡山大会テーマ、開催趣旨、研究協議テーマ、講演

- (1) テーマ

「こころ豊かなたくましい人づくり」
～変化に対応し、未来を拓く力を～

- (2) 開催趣旨

東日本大震災及び原子力発電所事故から早7年余りが経過した。この間東北地区の高校生、保護者及び教職員の方々は、困難な状況にありながら常に希望を失わず、かけがえのない一日一日を積み重ねてきた。その不屈の精神に敬意を表するとともに、全国から支援の手をさしのべてくださった皆様への感

謝も忘れてはならない。

そのような中、一方では過疎化、少子高齢化をはじめ、A I技術や職業のあり方等々、大きな変化が私たちの想像を超える速度で進行していることに気付かされる。学校においてもそれらへの対応が求められているが、急激な変化に対応しながらも忘れてならないことは、長期的視野に立った取組であり、中でも重視すべきは未来を担う「人づくり」である。幅広い人間性を身につけ、いかなる状況にも柔軟に対応できる力を備えた人材の育成が、いま何よりも必要となっている。

東北地区の高等学校PTA会員が集い、研修と交流をとおして、いかにして高校生一人ひとりが未来を担うに相応しい力を身に付けられるのかを考え、智慧と自信をもって子どもたちの成長を支えていく、この大会をその大いなる契機としよう。

(3) 研究協議テーマ

「社会の変化に対応し、未来を切り拓く子どもたちの力を育むPTA活動」

(4) 講演

演題 「スポーツの力 ～子どもたちの未来に向かって～」

講師 筑波大学体育系教授 山口 香氏



(デザイン：福島県立安積高等学校 檜村俊智)

第67回東北地区高等学校PTA連合会

郡山大会次第

期 日：平成30年7月5日(木)～6日(金)

場 所：福島県産業交流館ビッグパレットふくしま、ホテルハマツ

○7月5日(木) 会場：ホテルハマツ

情報交換会 17:30～19:30

	司会	渡邊 奈美
歓迎演奏	「楽都郡山」ご当地キャラクターバンド	がくとくんバンド
オープニング	福島県立あさか開成高等学校	フラ・タヒチアンダンス同好会
1 開会のことば	大会実行委員長	樽川 啓
2 あいさつ	大会会長 (一社)全国高P連会長	石川 直哉 牧田 和樹
3 祝 辞	福島県教育委員会教育長 郡山市教育委員会教育長	鈴木 淳一 小野 義明
4 来賓紹介	大会副実行委員長	三瓶 亜記子
5 鏡 開き		
6 乾 杯	福島県高等学校長協会会長	阿部 武彦
7 祝 宴		
アトラクション	高柴ひょっとこ踊り サクソフォン演奏	高柴デコ屋敷観光協会 藤田 久実子
8 中 締 め	大会副実行委員長	伊藤 博之

○7月6日(金) 会場：福島県産業交流館ビッグパレットふくしま

1 開会行事 9:30～10:20

	司会	渡邊 奈美
オープニング 詩の朗読	詩人	和合 亮一
黙 禱		
(1) 開会のことば	大会実行委員長	樽川 啓
(2) あいさつ	大会会長 (一社)全国高P連会長	石川 直哉 牧田 和樹
(3) 祝 辞	福島県知事 郡山市長	内堀 雅雄 品川 萬里
(4) 来賓紹介	大会副実行委員長	高橋 晃
(5) 表 彰		
① 表彰状贈呈	受賞者代表	高橋 照伸
② 感謝状贈呈	受賞者代表	霜山 清
③ 平成29年度広報紙コンクール表彰	受賞者代表	八戸工業大学第二高等学校

-
- ④ 受賞者代表謝辞 受賞者代表 霜 山 清
(6) 平成30年度東北地区高P連役員紹介
(7) 閉会のことば 大会副実行委員長 鈴 木 則 夫

2 研究協議 10:30 ~ 12:00

テーマ 社会の変化に対応し、未来を切り拓く子どもたちの力を育むPTA活動

- コーディネーター 福島県立磐城高等学校長 阿 部 武 彦
(1) 研究発表 各 県 代 表
(2) 質疑応答
(3) 指導助言 桜の聖母短期大学学長 西 内 みなみ

3 昼食・休憩 12:00 ~ 13:00

4 高校生発表 (12:15 ~ 12:45)

福島県立郡山商業高等学校 チアリーディング部
福島県立塙工業高等学校 和 太 鼓 部

5 講 演 13:00 ~ 14:30

講 師 筑波大学体育系教授 山 口 香 氏
演 題 スポーツの力 ~子どもたちの未来に向かって~
講師紹介 大会実行委員長 樽 川 啓
花束贈呈 大会副実行委員長 伊 藤 博 之

6 高校生発表 14:40 ~ 15:00

郡山市高等学校合唱連盟・郡山市高等学校管弦楽団
(合唱: 安積・安積黎明・郡山東・郡山・日本大学東北・郡山女子大学附属)
(管弦楽: 安積・安積黎明・郡山商業・日本大学東北)

7 閉会行事 15:00 ~ 15:10

- (1) 次期開催県あいさつ 山形県高等学校PTA連合会会長 細 谷 隆 良
(2) 閉会宣言 大会実行委員長 樽 川 啓

オープニング



詩朗読

和合 亮一

決意 和合亮一

1

大きな地震があった
山や海や町が揺れた
津波がやってきた

たくさんの人が
鳥になって 風になって
水平線の向こうへと
行ってしまった

きみのことを
見つけます
何が見えますか
一番星ですか
涙ですか

命ですか
明日ですか
知って下さい
いつか
赤い雲の先で
光を見あげて
ずっと生きていく
わたしたちを
まっすぐな道を
夕焼けを

2

福島に風は吹く
福島に星は瞬く
福島に木は芽吹く
福島に花は咲く
福島に生きる

福島を生きる
福島を愛する
福島をあきらめない
福島を信ずる
福島を歩く

福島の名を呼ぶ
福島を誇りに思う
福島を子どもたちに手渡す
福島を抱きしめる
福島と共に涙を流す

福島に泣く
福島が泣く
福島と泣く
福島で泣く
福島は私です
福島は故郷です
福島は人生です
福島はあなたです
福島は父と母です
福島は子どもたちです
福島は青空です

福島は雲です

福島を守る
福島を取り戻す
福島を手の中に
福島を生きる

福島に生きる
福島を生きる
福島で生きる
福島を生きる

3

光はどこか
光はどこか
わたしとあなたの
胸の奥だ
情熱の火だ

火はどこか
火はどこか
わたしとあなたの
胸の奥だ
決意の火だ

道を行くのだ
野を行くのだ
風に追われるのだ
雲を追うのだ
わたしとあなたの

働く手で
季節の木々を集めて

燃やすのだ
炎を
手から手へ

心のなかで
火が燃えている
胸のなかで
火が燃えている
言葉のなか
火が燃えている

手のなかで
火が燃えている
あなたの手を握ると
同じ力で返してくる
これが
生きている力だ

命を
明日を
故郷を
まっすぐな道を
夕焼けを
子どもたちに
手渡すために

福島に生きる
福島に生きる
福島で生きる
福島を生きる

開会行事・開会あいさつ



第67回東北地区高等学校PTA連合会
郡山大会会長

石川 直哉

本日は、鈴木正晃福島県副知事をはじめ、お忙しい中多くのご来賓のご臨席を賜り、誠にありがとうございます。全国高P連の牧田会長も遠路お越しくださいます。誠にありがとうございます。そして、東北地区高等学校PTA連合会の皆様、音楽都市・郡山によろしくお越しくださいます。福島県高P連会員一同、心から歓迎申し上げますとともに深く感謝申し上げます。本日、共に研修に励み、交流の機会を持つことができますことを、何より喜ばしく感じております。研究協議で発表される各県連の代表の皆さん、どうぞよろしくお願いたします。

先ほどの和合先生の詩の朗読にもありましたが、忘れられない、忘れてはいけない、東日本大震災から7年余りが経過いたしました。福島県の避難者は最大16万5000人、今なお5万人の方が避難を余儀なくされ、5万人のうちの2万人が18歳未満の子ども達という現状であります。先月14日、東京電力が福島第二原発の全基廃炉を表明しました。廃炉は県民の総意ではありますが、原発依存からの脱却、企業立地においては補助金制度に依存せざるを得ない状況など、課題は山積しております。

そのような中、震災や原子力発電所事故を経験した福島の子どもたちは、他者を思いやる気持ちのやさしさ、故郷の復興に携わりたいという思いが芽生えており、懸命に学ぶ高校生の姿からは、学びへの強い意欲と困難を乗り越えようとするたくましさを感じられます。これまで多くの皆様からご支援をいただきましたことに、改めて深く感謝申し上げます。

さて、現在の社会は急激に変化をしております。そのような変化の中で成長していく子どもたちのために私たちPTAは何ができるのか。私たち自身が背中を見せることだと思います。私たち自身が学び続ける姿勢を子どもたちに見せる。夢や人生を語る。そのようなことが子どもたちを勇気づけ、子どもたち自らが、未来を切り拓く力を身につけることに繋がっていくものと信じております。評論家でも傍観者でもなく当事者として、共に修養を積み重ね、人工知能に負けない人間力を磨き高め、東北の子どもたちの成長を支えてまいりましょう。

最後に、郡山大会の開催にあたり、福島県教育委員会をはじめ、関係諸団体の皆さまから多大なるご支援、ご協力を賜りましたこと、樽川啓実行委員長はじめ、郡山大会実行委員会の皆さまの絶大なるご尽力を賜りましたことに心から感謝申し上げます。本日はよろしくお願いたします。

あいさつ



一般社団法人全国高等学校PTA連合会会長

牧田 和樹

皆さんおはようございます。本日はお忙しい中、鈴木副知事さん、吉崎副市長さんはじめご来賓各位にご臨席を賜りましたこと、共催の一人として御礼を申し上げます。

さて、この福島での地区大会は震災後2回目ということですから、つまり、東北6県順番に地区大会の開催を回しているわけですが、一回り終わったということでもあります。そこにも非常に感慨深いものがありますが、いまだに傷跡が残っていることを考えますと、我々の、日本国民の闘いといいますか、復興に向けた取り組みにはまだまだ頑張らなければという決意を新たにしているところです。

皆さんご存知かもしれませんが、文部科学省でPTAを所管している部局は生涯学習政策局という所です。恐らくほとんどの都道府県もPTAの担当セクションは生涯学習課ですとかそういった名前がついています。しかし皆さん考えてみてください。不思議だと思いませんか。どうしてPTAが生涯学習、社会教育に入っているのかなど。違和感を覚える方もいらっしゃると思います。つまり、PTA活動自体が社会教育、生涯学習の一環であるという位置づけで、我々は生学と言っていますけれど、生涯学習政策局に編制されているのです。

あえて誤解を恐れずに申し上げますと、私はこれは違うのではないかと考えているのです。そもそもPTA活動は、我々自身の学びのためにやっているのではなく、子どもたちのために活動しているのです。そういった意味からすると、私は初等中等教育局に編制されるべきものではないかと思うわけですが、皆さんはいかがお感じになっているでしょうか。

いずれにいたしましても、我々の活動、最近PTA不要論とかいうものが色々聞かれる世の中になって参りましたが、我々は何のためにPTA活動をやっているのか、誰のためにPTAをやっているのかということを今一度認識していただきたいと思っております。それがブレなければ私たちの活動は必ずや実を結び、私たちの愛する子どもたちのためになっていくのだらうと思います。

そのようなことから、東北地区大会が皆さん方にとって大変実りの多い機会であることを、心よりご祈念申し上げます。

最後になりますが、地区大会のお世話をいただいた福島県連の皆さまに感謝を申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。本日はよろしく願いいたします。

来賓祝辞



福島県副知事

鈴木 正晃(内堀雅雄知事代読)

皆さんおはようございます。福島県副知事の鈴木正晃でございます。本日は、内堀雅雄知事に代わりましてごあいさつをさせていただきます。本日、第67回東北地区高等学校PTA連合会郡山大会がこのように盛大に開催されますこと、心から御祝いを申し上げますとともに県民を代表いたしまして皆様の御来県を歓迎いたします。また、皆様におかれましては日頃から学校、家庭、地域を結ぶ橋渡し役として関係機関団体と連携を密にし、高校生の健全育成と教育環境の改善に努められるなど、教育の振興と発展に御尽力をいただいておりますこと、心から感謝申し上げます。

東日本大震災、原発事故から7年余が経過いたしました。福島県ではいまだ多くの方々が避難生活を続けておられるなど、様々な課題を抱えております。一方で、3月には福島県復興のシンボルであります、ふたば未来学園高等学校が初めて卒業生を送り出したほか、4月には避難指示が解除されました5つの町村において小中学校が再開するなど、これまでの取り組みが成果としてしっかりと形になりつつあります。

このような中、貴連合会員の皆様がこうして一堂に会し、各県、各学校が抱える課題への対応や、次代を担う生徒の豊かな心を育む取組について積極的な意見交換を通じ交流を深めますことは大変意義深く、学校教育のさらなる充実と健全な地域づくりを後押しするものと期待しております。

福島県といたしましては、今後とも子どもたちが夢や希望を持って力強く羽ばたいていけるよう学力を着実に伸ばす取組や、グローバル人材を育成するための英語教育、地域に根ざしたキャリア教育の充実などしっかりと取り組んで参ります。引き続き御支援、御協力をお願い申し上げます。

結びに、大会開催に向けて御尽力いただきました実行委員会の皆様をはじめ、関係の方々に厚く御礼を申し上げますとともに、御参会の皆様の方々の御活躍を心から御祈念申し上げ御祝いの言葉とします。

平成30年7月6日、福島県知事。代読でございます。

来賓祝辞



郡山副市長

吉崎 賢介 (品川萬里市長代読)

皆さんおはようございます。郡山市長の代理、吉崎と申します。12年ぶりになりますが、この郡山で第67回東北大会を開催していただきありがとうございます。郡山大会の石川会長、また樽川実行委員長はじめ関係の皆様にご挨拶申し上げます。

昨日からあいにくの雨ですが、この大雨で被災された方がいらっしゃいます。また、大阪北部地震では小学4年生が学校のブロック塀が倒れて亡くなりました。お悔やみを申し上げ、被災された方々にお見舞いを申し上げます。

今年で東日本大震災、原発事故から7年です。当時、小学生だった子どもたちが、今高校生の中心になっております。この7年間、本当に多感な時期に苦勞されたと思います。しかし、東北各地でスポーツ、芸術、文化、学力等においても全国で成果を出しているたくさんのお子様たちがいます。福島においても副知事さんのお話にありましたように、ふたば未来学園等を中心に子どもたちが頑張っています。この郡山も高等学校が公私立14校ございます。彼らも頑張ってくれています。

少子高齢化と言われます。子どもたちが頑張ってくれば未来は明るいと思います。新学習指導要領が小、中学校では移行期に入っており、高校も来年から移行期に入ります。平成34年度からは新指導要領で理数のグレードアップ、英語のスピーキング、道徳、或いは職業教育等々学びの活動は濃くなり、主体的で対話的な学びが必要になります。

一方で先生方も働き方改革、また学生さんも部活動において、一定の休日を2日とりましょうという今までは違った指導方針も出ております。ますます濃密で合理的な学び、あるいは高校生活というものが必要であると思います。

とはいえ、未来は彼らのものだと思います。東京オリンピック、パラリンピックはこの東北でも開催されます。ラグビーワールドカップは岩手で開催されます。このような中、我々行政、そしてPTAの皆様はよきコーチ役であり、サポーター役だと思っています。

昨日、ワールドカップサッカーのメンバーが帰ってきました。長谷部キャプテンが99%満足だと言っています。できれば、高校生の皆さんも社会に出る時、大学、各種学校に進学する時、99%の満足を持って上がっていただけるよう頑張っていければと思っています。

そして、またこの大会がいい触媒になることを祈願いたしまして、開催市として歓迎の言葉とさせていただきます。本日はおめでとございます。

受賞者代表謝辞



宮城県高等学校PTA連合会顧問

霜山 清

皆さんおはようございます。昨年度、宮城県高等学校PTA連合会会長並びに東北地区高等学校PTA連合会の副会長を務めさせていただきました霜山と申します。只今は、感謝状を頂戴いたしまして誠にありがとうございました。並びに同時に受賞された皆さん大変おめでとうございます。

私は昨年度1年間だけ県連の会長をしていたということで頂戴したわけですが、個人的なお話になりますが、PTAをこの春まで8年間続けて参りました。子どもが高校を卒業しまして、PTA活動も今年で終わり、8年間充実した時間を過ごさせていただいたと同時に、最後の年にこのような大役を務めさせていただいたことは非常にありがたく思っております。この8年間の中で活動してきて良かったと思うのは、PTA活動は子どものための活動ですが、やはり皆さんとの出会い、そして繋がったこのご縁に感謝しております。自分自身この出会いによって世界が広がったと感じております。

このことは昨年、宮城県の中でも皆さんに度々お話しさせていただいております。今日皆様にもお話をさせていただきました。是非、新しい仲間と出会って、繋がっていただけたらいいのではないかと考えております。

最後になりますが、この郡山大会を準備された福島県高P連の皆様には感謝を申し上げますとともに、東北地区高P連の今後ますますの発展を祈念してごあいさつとさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。

大会スナップ(3)



第67回東北地区高等学校PTA連合会

郡山大会 研究協議

社会の変化に対応し、未来を切り拓く子どもたちの力を育むPTA活動

コーディネーター 阿部 武彦(福島県高等学校長協会会長・福島県立磐城高等学校長)

指導助言 西内みなみ(桜の聖母短期大学学長)

発表テーマと発表者(発表順)

県名	テ ー マ	発表者・所属校
山 形	「地域をつなぐPTA活動」 地域とともにあるコミュニティ・スクールとして	山形県立小国高等学校 PTA会長 渡邊 重信
秋 田	「地域を共に生きる大人として」 協力し合う、学び合う、大人の背中を通して	秋田県立矢島高等学校 PTA会長 松田 孝志
青 森	「生涯PTA活動」	青森県立板柳高等学校 PTA会長 三戸 康正
岩 手	「本校PTAの活動報告」 学校と保護者をつなぐ活動は何ができるのか	岩手県立北上翔南高等学校 PTA副会長 高橋カヨ子
福 島	「次代を担うスペシャリストの養成を目指して」 地元企業との連携をとおして	福島県立喜多方桐桜高等学校 PTA会長 中條 明美
宮 城	「おらほの高校を守ろう！」 震災から7年を経て、本校が取り組むPTA活動	宮城県志津川高等学校 PTA会長 佐藤 信一

「地域をつなぐPTA活動」 ～地域とともにあるコミュニティ・スクールとして～



山形県立小国高等学校
PTA会長

渡邊 重信

小さな国と書いて小国町ですが、本当に小さな小さな小規模校です。小国高校の校訓は、「自立・忍耐・向上」です。平成30年の生徒スローガンは「万里一空」です。これは、目的・目標・やるべき事を見失わずに励み努力するという意味です。「興學」という掛け軸がありますが、こちらは本校の玄関に飾られている掛け軸です。米沢藩主の上杉鷹山公の直筆と伝えられています。

次に、小国高校の公認キャラクターを紹介します。こちらは「おぐまん」というキャラクターですが、これは高校の生徒たちの公募によって選ばれたキャラクターで、平成28年度に校内の公認キャラクターとなりました。こちらを使って今、子どもたちがいろんなことを企画しております。

PTA活動の一番私たちが大事にしているのは「朝のあいさつ運動」です。PTA会員全員が校庭で、本校の校門前で職員や生徒と一緒に朝のあいさつ運動をやっています。この取組は、小国町町内において、小学校から中学校、高校とずっとやってきているもので、本校の生徒は地域の方々と顔見知りというものもありますが、非常にあいさつが良いと町内でも評判になっております。

次に、学校行事に対する協力としては、6月の体育祭と7月の学校祭の主に2つをやっております。体育祭では、保護者の方々にも協力していただき競技の補助役員を務めます。学校祭ではPTA役員が山形のソウルフードでもある、「どんどん焼き」を作って参加しています。クラスごとに生徒たちが作った食べ物や催物の発表を投票形式によるイベント等を行って、多くの方が見に来てくださいます。地域の方々とPTA、そして他校の生徒さんも来てくれるので、楽しくやることによって一層町内の絆が深まっていく。そんな高校の楽しい行事の一つとなっております。

PTA活動の校外活動巡視というものもやっています。8月から9月に行われる地域のお祭り、そして、花火大会においては、生徒の安心安全、より楽しめるようにということで、私たちも夜の巡回をしております。ちなみに私はこの8年間町の花火大会の実行委員長をしており、こちらの活動には参加できておりませんが、見ていると高校のPTAの方々がしっかりと子どもたちを見たり、地域の方々、役員の方々に、率先してあいさつをする光景を見ていると、本当に良い高校のPTA活動ができていると実感できます。

PTA活動の中に、広報活動というのがあります。年2回広報誌を作っております。「よこね」ですが、こちらは自分たちが子どもたちに関わることであったり、学校行事であったり、PTAがどういうことをやっているのかを知らせる広報誌になっています。

その他の活動では、チャレンジショップの協力をしております。画面は本町にありますショッピングセ

ンター・アスモ内での光景です。PTAでは恒例の餅の振る舞いを行っております。多くの町民に来ていただき、生徒の体験学習を盛り上げています。チャレンジショップは商業のビジネス基礎という授業の実践編として、商品の仕入れや販売等体験するものです。地域の方々や企業の方々に協力を得て、2年生が中心になって活動しています。昨年は、山ぶどう焼きドーナツ、レモンケーキザントクーヘン、レープクーヘンクッキーの三種類を作成し、限定200個、全て100円の設定で販売しました。生徒たちの頑張りや協力してくださった方々の尽力、事前の宣伝効果により、あっという間に完売しました。

私たちPTAのその他の取組として、先程ご紹介した「おぐまん」というキャラクターを使って、PTAおぐまんTシャツというものを作りました。すみません、暑いので(Yシャツを脱ぎ、おぐまんTシャツ姿になる)こんなTシャツを着て体育祭を盛り上げ、来月の学校祭でもこちらを着てアピールしていくことを考えております。

そしてもう一つは、食の安全ということで、高校では給食がございませんで、管理栄養士とフードスペシャリストという資格をとった先生がいますので、先生方と一緒に私たちも食を考えて、子どもたちに良い食事を採らせようようと考えています。

地域との連携ですが、まずは、こちらの写真、小国高校の生徒が卒業生と地域の方々への日頃の感謝を込め、雪像を作っています。暗くてわかりませんが、おぐまんと雪灯籠を作って町の景観を良くして、楽しんでいただく、それで日頃の感謝を表す活動を生徒とPTA、そして地域の方々で行っています。

小国町では小中高一貫教育というものを平成13年度から行っています。その他にも昨年度は東北ではじめて県立高等学校でコミュニティ・スクールとなりました。こちらは地域の方々が学校に携わる。地域の方とPTA、そして学校の先生と学校運営を考え、どういった子どもたちを作るかという会議をしたり、地域の方々が学校や生徒に関わる機会を増やすというものです。その他に、小国町では合同学校運営協議会というもの、小・中・高の学校運営協議会を開催しております。来年度からは保育園を含めた、保・小・中・高一貫教育として、いろいろな展開をやって行きます。先進的な取組ですが、まだ始まったばかりですので、できれば5年後、またこの場で発表したいと思っています。

もう一つ、今日、告知したいと思っております。小国高校で8月に生徒たちが主体となって開催する「全国小規模校サミット」の募集をかけております。昨日の情報交換会の時に連絡が入ったのですが、高知県の方からぜひ参加したいということで、来月、来ていただくことになりました。今日参加されている学校も、申し込んでいらっしゃると思いますが、現在、7校の申し込みがあります。詳しくは小国高校のホームページそして、小規模校サミットと検索していただければ、詳しく書いてあります。7月10日まで延長しております。是非申し込んでください。どうもありがとうございました。



「地域を共に生きる大人として」 ～協力し合う、学び合う、大人の背中を通して～



秋田県立矢島高等学校
PTA会長

松田 孝志

矢島高校は、秋田県由利本荘市に5つある高校の1つです。由利本荘市は、平成17年、1市7町が合併いたして誕生した市であります。秋田県の沿岸南部の市ではありますが、矢島高校がある旧矢島町は、霊峰「鳥海山」の麓に位置しまして、山間部と言ってもいいほど内陸にあり、場所によっては3m近く雪が降るといった豪雪地帯でもあります。

10年前矢島高校は学校再編成の流れの中、存続が危ぶまれていましたが、市は矢島中学校校舎の老朽化に伴う新築に合わせ、中学校と高校が一体となった校舎を建築し、全国でも珍しい「校舎一体型の中高連携校」となりました。写真が出ていますけども、中学校と高校が並んで建築されました。ですので、廊下の長さは端から端まで200mあります。向こうは小さくなって見えるぐらい真っすぐな廊下です。たぶんもしかすれば、調べたことはないですが、全国でもそうはない長さではないかなと思っています。現在、矢島高校は、普通科2クラス、定員は1学年70名の小規模であります。ここ2年あまりは大幅に定員を割っており、現在の全校生徒数は110名となっております。

矢島高校の教育活動は、旧矢島町との深い関係から成り立っているのが特徴です。主なものとして、地域の歴史や、文化に対する理解を深めるとともに、豊かな自然や地域社会に触れ、自己の在り方、考え方、生き方を考えることを目標としている総合的な学習の時間「鳥海総合」。地域の今を理解し、地域の将来と自分が担っている役割について自覚し、これからの社会を生き抜く態度を養うことを目的にした、学校設定教科の「地域学」。そして、地域と一体となった「地域貢献活動」があります。

また、今年度からは、これまでの地域との関わりを更に充実させるため、「コミュニテイ・スクール」を導入しました。秋田県の高校としては初の導入となります。先ほど、小国高校さんが昨年度登録されて、東北1番だと言っておられましたので、うちが東北2番なのかなと思っています。資料の方は東北でも初のケースと書いてありますが、東北で2番目と直してください。1番だと思って自負して書いたんですけど、残念ながら2番目だと今日知りました。

次に、PTA活動について説明いたします。矢島高校のPTA活動は、人が変わっても「確実に事業を繋いでいける」、「誰でもできる最低限の活動」を大事にしております。基本的には、一人で背負い込まず、無

理をしない。ただし、お互いに少しずつ負担し、協力し合うことも大切にしています。「PTA総会」は、かつては80%の参加率を維持していましたが、今年は64.6%の参加率でした。多くの保護者に参加いただくため、開催日を土曜日にしたり、総体の壮行会を同じ日に開催してもらうなどの工夫をしております。また、欠席した保護者に対しましても、後日、改めて説明会を開催するなどしています。

「地区PTA」は、地区の保護者同士、また、保護者と教職員を繋ぐ場として、4つの地区で開催しています。地区PTAには多くの教職員に参加いただき、意見を交わすことで、それぞれの地域の特色や問題、お互いによく知ることができる貴重な機会となっています。

「学校祭」では、PTA役員が中心となり、屋台と喫茶を運営し、地区を超えて保護者を繋ぐ場となっています。普段は、顔を合わせる機会の少ない他の地区の保護者同士が、力を合わせて作業することで一体感が生まれます。それは、「学校祭」終了後の慰労会に、その参加したほとんどのメンバーが、全員参加という形に近いのですが、参加いただいていることにも現れているものと思います。この繋がりは、大変大きなもので、この場で次年度の役員の選出にも繋がるような繋がりと言いますかきっかけも生まれることがあります。

「PTA研修旅行」は、保護者と教職員、そして保護者のOBを繋ぐ場です。「みんなで行けば。景色も違って見える」を合い言葉に日帰り計画し、夕方にはそのまま懇親会となります。保護者OBの参加は、子育てが終わり地域で活躍している人も多く、いろいろなアドバイスをもらえるとても良い機会になっています。

PTAの活動を通して、それまで出会うことのなかった地域を越えた結びつきも生まれます。その繋がりは卒業後も続いており、年に一度は集まるようになりました。今年度は、正式な保護者OB会の設立を準備しているそうです。その発起人は「コミュニティ・スクール」の核となる、学校運営協議会の委員にも加わっていただいております。

矢島高校のPTA活動は、保護者も教職員も、「地域を共に生きる大人」として、同じ目線で学び、考え、話し、地域と矢島高校への思いに溢れた活動を行っています。自分も楽しみながら、協力し合い、学びあう姿は、これからの地域を作る上でも、大きな活力になるものと思います。社会の急激な変化の中でも、人との結び付きが、「いろいろな困難を、乗り切る力となる」ことを、大人の背中を通して子どもたちに伝えたい。まずは、私たち大人が、他の人や地域に関わることの大切さと楽しさを示していくことが、大事なのではないのでしょうか。ご清聴ありがとうございました。



「生涯PTA活動」



青森県立板柳高等学校
PTA会長

三戸 康正

どうも皆さん、こんにちは。暑いね。青森県立板柳高等学校の三戸です。ちなみに昭和57年3月、この学校を卒業して、時を経て、愛する妻との結晶のすべての子どもたちも、この板柳高校にお世話になっております。

おらほの学校、今年で80周年なんだばって。昔は、普通科、家政科の2学科で全校生徒数1,000人超の学校でした。最近の少子化の影響で子どもたちが年々減少。今年の入学生は70名定員のところ、45名の入学者でした。残念ながら5年後、平成35年3月において高校は閉校が決まっております。おらほの学校の10年の生徒の変化です。10年で約半分。30年、40年前の1/6になっております。

それでは主なPTA活動を紹介します。まずは体育祭です。6月に開催しています。保護者が学校さ来てくれる一番の行事です。三脚を片手に観覧する人もいます。高校さ来て、まさか運動会ができるとは思わない保護者も沢山います。なので喜んで張り切って来ています。生徒も親が学校へ来ることをあまり嫌がらないようです。せっかくなので、去年から、おらほの父兄でアイスの提供を実施しております。アイスのテント前には長蛇の列と、「ありがとうございます」の元気な生徒の声が飛び交い、私たちの活力にもなっております。幼稚園、小学校から同じ顔ぶれの仲間と過ごしている子どもたちなので、社会に出るまでの時間に、どれだけ多くの人たちと関われるか、その機会をどう作ってあげるか、私たちPTA活動を通しての自身の課題でもあります。

PTAの活動としては、「PTA食堂」を実施しています。去年は、そば、焼き鳥、ドーナツなどを販売して、以前は板高餅などオリジナル商品も販売していましたが、10月開催のこの時期はりんご農家が多いんですね。10、11月は、ほとんど畑に出ているという状況で、父兄の参加も大変苦慮しております。この時にできるだけ参加して欲しいので、保護者の年齢層も若くなったので、毎年メニューの意見を出し合っているようにしています。先輩たちが築いてきた伝統を守ることも大切ですが、保護者が「楽しく参加できる」ように一番考えています。

次の写真(スクリーン画面)は、校地内清掃活動と朝の一声運動です。合宿所の障子と網戸の張り替えの時のものです。保護者間でも私と一番若い役員ですと、約20歳ぐらい違いますので、PTA活動は私にとって世代間交流の場でもあります。清掃活動そのものよりも。そういった、新鮮な時間を体験できる貴重な機会

となっております。

(スクリーン画面)、皆さん何かを想像されましたでしょうか？ 昨年の草刈りの様子です。グラウンドの草刈りを前会長と仲良く刈っておるところです。おまけですね。

今後の課題としては、年間のPTA行事はご覧のとおりですが、義務教育のPTA活動では保護者が子どもたちと触れ合うことが多かったのですが、高校の活動では先生との時間が多く、子どもたちと接することが無くなったと感じています。

(スクリーン画面)このグラフは、ここ5年の本校の体育祭と板高祭について、生徒数に対しての参加率を表したものです。生徒数はかなり減少していますが、体育祭、板高祭に限っては参加率は減ってはいません。閉校まで、さらに参加率の向上を図るため、企画の工夫を重ねたいと思っています。

そこで、私がこれまでの自分の経験を通して高校のPTA活動に感じる魅力をまとめてみました。まずは、「人との繋がり」です。義務教育のPTA活動ではいつも同じ顔ぶれ、という集まりだったのですが、高校になり活動の範囲が広がりました。その分、私の受けた影響も大きいものでした。研修会や会長会議でのディスカッションなど、学ぶ機会にも恵まれ、社会の変化には敏感になりました。おかげで、子どもとの会話が減るようなこともなく過ごしてきました。特に娘ばかりを育ててきましたので、成長過程で父親の存在が、鬱陶しくなる日が来るだろうと覚悟していましたが、5人ともそんな時期もなく過ごして来れました。これは、私自身がPTA活動を通して活性されてきたおかげだと思っています。正に自身の成長の場でもあると思えます。

最後に、私も長女の小学校入学から現在高校2年生の5女まで、今年で27年目のPTA活動となります。長女の頃は、まだ私も若く、先輩方に教わりながらここまでどうにかやってきました。家庭と仕事だけの生活でしたら、こんなに充実した時間を過ごせていないと思っています。

私たちは親として、地域の大人として、子どもたちを守り、育てていかなければいけない役目があります。しかし、この激動の社会を迎え、私自身、その対応に四苦八苦しておりますが、このような場に立たせていただく機会や、また、たくさんの出会いがあって、私も親として勉強させていただいたと思っております。

これまでの数々の感謝の気持ちを込めて、そして自身の成長のため引退までPTA活動を楽しんでいきたいと思っています。長々とお話しましたが、ご清聴ありがとうございました。



「本校PTAの活動報告」

～学校と保護者をつなぐ活動は何ができるのか～



岩手県立北上翔南高等学校
PTA副会長

高橋 カヨ子

岩手県立北上翔南高等学校のPTA活動報告を発表いたします。副会長3年目となりました。なかなか活発にならないところが本校の悩みです。昨年から学校の協力を得て、少しずつではありますが改善してきた点をこの場で発表したいと思います。

本校は、4月、9月、2月の3回の幹事会と、PTA主催行事のPTA総会、研修旅行、おやじ・おふくろの会、文化祭の4つくらいしか、それでもなかなか役員、監事をやってくれる保護者が少なく、苦勞しています。そこでどうにかして協力してもらえる保護者を増やす方法はできないかと、学校側と役員とで考えました。それにはまず、保護者に学校の事に関心理解をもっていただき、学校に来てもらい、お互いに話し合うことが目的ではない、学校に来て生徒たちの姿を知ってもらう取組が大切だと考え、役員が中心になって、運営に一般会員のボランティアを組織してみることにしました。学校行事やPTA企画行事に役員だけでなく、ボランティアを募集し積極的に保護者が学校に来てもらう機会を増やす努力を考えました。今年度も、昨年役員決めに効果があったPTA入会式のスライドを使った運動を紹介しました。

一について、学校を知ってもらう会報は年2回。年次通信は各学年3～4回で、日常の生徒の様子を知らせるものとして、「つなぐ」を発行しました。内容は、応援団練習が終わったとか、服装点検をしたとか、健康診断がありましたというような日常生活を知らせています。

二について、手作り教室や研修旅行は年に1、2回ですが、口コミが非常に大切です。参加した人から聞いたという保護者の参加が多いです。

最後について、お知らせが生徒から保護者に渡らないというクレームがあります。このようにファイルケースを準備いたしまして、小さく畳まない、紛失しないような工夫などもしました。

次に、PTA総会の様子です。例年、PTA総会は一割強の参加者しかなく、なかなか理解を得られていません。そこで、昨年は、楽しい雰囲気を始めようと、音楽部の協力を得て、ミニコンサートを開きました。出席いただいた保護者から非常に評価が良かったので、今年は音楽部の他に演舞の協力を得ました。逆に例年あった進路講演会は29年度で取り止め、代わりに部活見学を取り入れました。本校は、交通の便が決して

良い場所ではなく、かなりの生徒が親の送迎で登校している状況です。保護者からはPTA総会がある時は一緒に入りたいという要望がありました。そこでその日の部活動は短時間設定としていただき、我が子の活動状況見学後帰宅するという企画にいたしました。いずれにしても出席率が上がるように、まだまだ工夫が必要だと思っています。

続いて、文化祭の様子を紹介します。上の方は先生方が黒画用紙に一文字を切り抜いた布に、ボランティアの保護者が裏に色画用紙を付けている様子です。下の方は当日の朝、調理室での仕込みをしている様子です。調理室は生徒たちも利用するので、ごった返しました。手際よく作業が進められ美味しい「芋の子汁」を作りました。

次に、おやじ・おふくろの会を紹介します。(スクリーン画面)上の方は、おやじの会の手作りラーメンを作っている様子です。コシのあるラーメンをつけ麺にいただきました。下の方は、おふくろの会のツールペインティングのティッシュボックスを作っている様子と作品になります。毎回講師を迎え、楽しく過ごしています。

次に、(スクリーン画面)上の方が、朝の一声運動の様子です。「おはようございます」生徒の元気なあいさつが帰って来るので参加した保護者は楽しかったと言ってくれています。年間5回実施しております。下の方はPTA研修旅行の1コマです。ある大学のキャンパスをめぐる前に、一通り説明を受けている様子です。その時は、大学を2カ所周り楽しみにしていた昼食をとり、その後、仙台うみの杜水族館を楽しみました。

こちらは(スクリーン画面)、担当の先生が作られた、「つなぐ」という日々の学校の様子をお知らせするプリントです。写真部や担当の先生が撮影した写真をできるだけ多く利用し、タイトルだけでわかるような工夫をし、昨年は23回、月に、2～3回発行されました。担当の先生曰く、「できることは沢山あると思うが、忙しく働いている保護者が学校に足を運んでもらうことは難しい。ましてや、逆に、引き受けていただいている事に及び腰になっている。これからの活動で、何とか理解を得ながら、活発な姿勢で行きましょう」とおっしゃっていました。

最後に、本校は来年度、創立100周年を迎えます。これからまた、新たな船出となります。先生方、保護者、生徒を交え、輝き続ける学校でありたいと思っています。以上です。ご清聴ありがとうございました。



「次代を担うスペシャリストの養成を目指して」 ～地元企業との連携をとおして～



福島県立喜多方桐桜高等学校
PTA会長

中條 明美

福島県へよくこらったなんし。会津の北部に位置する喜多方ラーメンで有名な町から参りました。喜多方桐桜高等学校は、平成22年に喜多方工業高校と喜多方商業高校が統合され、来年で10周年を迎えます。3クラス、商業科2クラス計5クラスの編成で、地域で活躍する人材の育成に努めています。それでは、資格取得に向けての取組みと、生徒の活動、PTA活動の順で説明をさせていただきます。

まず、資格取得に向けての取組です。子どもたちは、資格・検定ロードマップで資格取得のスケジュールを立てています。工業科では、資格や競技会の成績を点数化し、合計点からゴールド、シルバーなどの称号が全国工業校長会から授与されるジュニアマイスター顕彰、品質管理の知識、筆記試験で評価する品質管理検定などに取り組んでいます。商業科では、生徒は特に簿記検定と情報処理検定に向けて、長期休業中は課外授業へ参加しています。これらの取組から自己肯定感が高まり、主体的な学習活動にも繋がっています。

生徒の活動についてですが、企業見学会。各科で企業や施設見学をし、専門知識を深め、進路意識の向上を図っています。2年次のジュニアインターンシップ。これは若者の就業意識の希薄化への対策として、自己の適性や適職を考える機会を与えていただいております。3年次の校内企業説明会では、生徒が各企業のブースを回り、約25分で説明を聞きとります。エリアマネジメント科と地域との連携。この学科は、地域の食文化・伝統工芸などについて、体験学習から地場産業や伝統の良さを分析し、「まち育て」のアイデアを提案できる人材の育成を目指しながら、喜多方ラーメンやみそ造り等の体験学習を行っております。

7月と11月に行われる喜多方市のイベントでは、工業科と商業科のコラボレーションを行っています。商業科の生徒が飲食物の企画・販売・決算等を行う販売実習を実施しています。両実習で、PTAと生徒が一緒になってゴミ拾いボランティアを行っています。地域貢献とお互いの絆を強める機会になっています。また、昨年の11月の販売実習では、工業科の生徒が制作した、バット型キーホルダー、LEDあんどん、エアプランターの製品を商業科の生徒がパッケージングをしまして、販売を行いました。完売で、来場者からは大好評でした。

次は、PTA活動についてです。まず、生徒と保護者の語る会・そば会についてです。語る会は、生徒と

保護者がお互いに今何を考え生活しているかなどを語り合い、親子の連携や絆を強めることが趣旨です。話の内容は自分の親や教職員に伝えることはないことを厳守しています。

そば会は、語る会終了後、保護者がそばを茹でて生徒に振る舞っております。生徒はそば会のみ参加も可能で、昨年は参加者83名で大盛況でございました。

語る会に参加した生徒の感想は、「自分の親以外の保護者と話す機会がないので貴重な体験だった。」「SNSが話題になり、改めて利用上の注意点を確認できた。」などです。保護者の感想は、「事前に生徒から時事問題などテーマを出してもらった方が話しやすかった。」「いじめは親から見えているようで見えていないので、生徒との会話の機会は必要である。」「自分の仕事や会社の様子などを聞いてもらえると、生徒の進路のモチベーションが上がるかもしれない。」などでした。問題点は、ここ数年、語る会の参加者が少なく、生徒会役員などに固定化されてしまっていることです。また、そば茹でをお手伝いいただく保護者も減少しております。

企業見学会は県外と地元企業それぞれ年1回ずつ実施しています。県外には近隣県の企業の開拓や就職のお礼を兼ねて行っております。地元企業見学会は、保護者の進路意識を高めるため、地元で大口の就職先を訪問させていただいております。参加した保護者の感想は、本校卒業生の話を聞いて、企業内の様子を肌で感じられ、進路意識が高まった。人材育成法を聞いて有意義だった。保護者同士の交流を深められ、教育に熱心な保護者が参加することで、企業に誠意が伝わり、次年度の求人につながることもありました、などです。

最後に、今後のPTA活動についてです。卒業後の進路実現は、生徒本人の自覚が必要なことは当然ですが、後押しする保護者が、就職先の様子や、多様化していく社会が必要とする人材や資格を明確に把握すべきと思っております。PTA活動の中での企業見学会、進路説明会などは、その有効な手段となっております。今後もPTA活動に多くの保護者に参加していただくことを望んでおります。ご清聴ありがとうございました。



「おらほの高校を守ろう！」 ～震災から7年を経て、本校が取り組むPTA活動



宮城県志津川高等学校
PTA会長

佐藤 信一

「おらほの高校を守ろう！」～震災から7年を経て、本校が取り組むPTA活動～と題して発表をさせていただきます。私自身も志津川高校の卒業生であり、私の親父もそして息子も卒業生、現在は、2番目の息子が3学年に在籍中です。

宮城県志津川高等学校は、宮城県の北東・沿岸部に位置し、森・里・海の恵みが豊かな南三陸町にある唯一の高校で、今年94周年を迎える伝統校です。南三陸町は7年前の東日本大震災で、町の居住地の6割が消滅するという大きな被害を受けました。現在は復興整備事業を進めながら、町の基幹産業である漁業と観光を中心に、新たな町づくりを進めています。

志津川高校は情報ビジネス科と普通科の2学科があり、全校生徒数201名、全校で9クラス。1クラスの人数は12名～30名の小さな学校です。部活動では、陸上競技部が昨年度、郷土芸能愛好会が一昨年。それぞれインターハイ、全国総文祭に出場するなど、小規模校ながら学校や地域全体の盛り上げに貢献しています。

情報ビジネス科では、地域と一緒にあって取り組む授業を多く取り入れています。たとえば、毎年3年生が取り組んでいる「南三陸モアイ化計画」では、平成22年度から生徒が町のシンボルであるモアイ像をデザインした缶バッチ・ストラップ・かるたなどを制作・販売し、津波によって破壊された町民バスの購入資金を賄う活動を続けてきました。その活動が実を結び、平成28年12月には念願の町民バス購入を実現しました。また、地元特産品のインターネット販売や震災の翌月以来ずっと続いている「福興市」に毎月出店するなど、地域との繋がりを大切に活動を行っております。

次に本校のPTA活動について紹介いたします。保護者側の役員数は20名です。生徒減少に伴う学級減に対応し、2年前に役員の改選がスムーズに行われるよう規約を改正して役員数を7名減らしました。PTAの主な活動は、PTA総会、学年PTA、クラス懇親会、高P連各種行事などの定期的な行事のほか、朝の「マナーアップ運動」、また昨年度からは文化祭でチャリティーバザーや保護者対象の「進路セミナー～進学マネー講座」なども行っております。生徒・保護者双方に、役立ててもらえる企画を取り入れることで、より充実したPTA活動ができると感じています。

震災の影響で他地域へ転出した世帯も少なくないこの南三陸町では、生徒数減少が顕著です。30年前と比

較して町の人口は4割減、志津川高校の生徒数は7割の減となります。こうした入学者数減少に歯止めをかけるべく、様々な手を講じています。平成26年度からはPTA総会とさらに当日欠席された方を対象に、欠席者説明会を開催し、毎年8割以上という高い参加率が続いています。これは、保護者の「学校への期待や関心」の表れであると考えています。

昨年、町からの補助金約1,200万円の支援を受けた同窓会により、「志津川高校学習支援センター・志翔学舎」が開設されました。平日夜9時まで生徒の学習を支援する環境が整備され、部活動が終わった後でも、じっくり時間を割いて学習できるようになりました。通常の授業の予習復習や中学校の復習、学び直し、そして大学受験のため、生徒個々のニーズに応じた学習支援が行われ、生徒・保護者からも好評です。

「志津川高校を魅力的な高校として盛り上げて行こう」という機運が地域全体で広まり、PTA会員でも何かイベントをと考え、高校での文化祭においてバザーを行い、収益金を生徒会に寄付する活動を行いました。また、30年前からは、文化祭前日には生徒が町の中を仮装して練り歩くのが、恒例となっており、PTA役員からも自然な形で一緒に参加して、盛り上げていこうという話になったのです。

恵まれたとは言い難い環境の中で、青春時代を過ごした子どもたちが、将来、「地域の人たちの役に立ちたい」あるいは、「国内・外の発展のために自分の力を発揮したい」と感じて目標に向かう時に、「彼らにとって生まれ育った地域の人たちからサポートを受け学んだこと」が、前に踏み出す力の糧になってくれるのではないかと、また、そうなってもらいたいと思います。

全国的に少子化の問題と常に向き合いながら、同じようにしんどい思いをされている自治体や学校関係者は多いと思います。そうした中で、改めて思います。子どもたちは地域のそしてこの国の宝物であると。

この町で18歳まで生活した、生徒の7割が町から旅立って行きます。その子どもたちの心の傍らにいつも「故郷」があってほしいなという想いから、私は町の国道沿いにこうした看板を作成し掲げています。町に残る子も、巣立っていく子も、皆ルーツは同じ。心の真ん中に。南三陸プライド。

大海に放たれた鮭の稚魚が、数年後立派に成長して故郷の川に帰って来るように、巣立った子どもたちの多くが町に関わってくれることを願っております。また、新天地で活躍の場を得た子どもたちも、人生のどこかの場面で、故郷が一步前へ進むその原動力になってくれるなら、私たちにとって大きな喜びです。

これからも町の子どもたち、おらほの学校と大いに関わり、盛り上げて行きたいと思います。そして会場の皆様、一步一步再生へ歩み続けている南三陸へ是非お越しく下さい。お待ちしております。

最後に、子どもたちの健やかな成長を祈願し、今大会のためにご尽力されました関係者の皆様に、心から感謝を申し上げ、発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。



質疑応答

Q：青森県立田子高等学校

志津川高校の発表の中で、支援事業を新しくされたということですが、その取組みを考えた期間、行政、それから町民の方々の協力、そういうところの経緯をお聞きしたい。私たちの学校も小さい学校ですが、英語に特化しているところもあるので、そういう支援を行政や後援会にお願いしたいと思っています。

A：宮城県志津川高等学校

支援センター・志翔学舎についてだと思いますが、子どもたちは支援を受けて頑張っております。学業は本分ですので、それに特化したのですが、それ以前に、南三陸町では人口の流出が著しく、最近は子どもたちの間でも、このままではうちの学校も無くなってしまう、100周年まで持たないじゃないかと心配する声が上がりました。

そうなってからでは遅い。我々大人たちが一生懸命にやらないとダメだと声を上げ、そこに、ある支援団体からお話をいただき、行政に話を持って行き、行政も地域に唯一の学校が無くなると町の衰退に繋がるということで、バックアップをいただきました。これ以上詳しいことは知らないのですが、とにかく、町全体で学校を残そうという思いから、志翔学舎という学習支援センターができたということです。

それ以外にも、本校は全国、世界から支援を受けました。今年ようやく校庭から仮設住宅が無くなり、間もなく高校野球が始まりますが、生徒たちは、今まで声援をいただいた仮設住宅の方々に頑張る姿を見せ、1勝、2勝したい。それが町民の励みになるし、自分たちが飛躍する糧になると言っております。

Q：福島県立大沼高等学校

どの学校でも悩んでいるPTA総会の出席率。本校もいろいろ策を練っても2割ぐらい。進路講演会を総会に組み込むとかやるのですが、出席率が上がるのは10%に満たない。報告会を当日欠席された方のためにやっても3割にも満たない。この驚異的な(8割以上という)数字。これはどこに秘策があるのか。

A：宮城県志津川高等学校

背景には、震災で長く散り散りになったことがあると思います。自分の故郷、南三陸、そして志津川高校に子どもたちを通わせたいという親御さんがずいぶんいらっしゃる、今の町の状況、そして学校はこれからどうなるのかが非常に不安だったという背景もあると思います。そういうことで、初回の4月のPTA総会はまずまずの出席率がありましたが、ご家庭の事情等で出席できなかった方々には、改めて欠席者説明会ということでご案内を差し上げました。あえて休日にせず、平日、お仕事が終わった6時半からの開催にしました。初回に出席したご父兄の口コミ、ぜひ参加した方がいいよと、直接聞けば学校の現状もわかるし、これからの学校のあり方もわかるので出席した方がいいよ、と口添えいただいたことも、参加率増加に繋がっていると思います。

今年も、講演会はやったのですが、以前それだけに特化した時は、あまり参加率は良くなかったはずで、出席できなかった方々に改めてご案内し、先に出席した方々、そして生徒、先生方からも一声かけて、「お父さん、お母さん、こないだは来れなかったけど、今度の欠席者説明会は是非出席してね。」という一言があって、出席率は上がってきたのだと思います。

指導助言



桜の聖母短期大学学長

西内 みなみ

各校のPTAの皆様ありがとうございました。ここでコメントをさせていただける素晴らしい機会に心から感謝しています。予め資料を拝読させていただきましたが、直接お話しを伺うことによって、こんなにも感動の質が違うのかということに驚いています。

この国の子どもたちを取り巻く環境が非常に貧しく、子どもたちに大きなハードルを突き付けていることは、皆様が痛感しているところだと思います。少子化、高齢化、何より家族が分断され、孤独化し、そして、それぞれがバラバラになっているこの時代。何よりこんなに教育にお金を掛けない先進国も珍しい。先日、カナダで会議があり、私の修道会の学校の人たちと話す機会があったのですが、15歳を過ぎて親に教育の負担が掛かっている国は珍しいということに改めて実感してきました。今日お集りのPTAの皆様が、子どもにどれほど大きな犠牲と奉仕で尽くしていらっしゃるかを痛感しております。

今日の発表を伺い、気付いたことが3点あります。PTAを楽しみながらしっかりと子どもたちと向き合っている皆様は、強い巻き込み力、発信力、協働力の3つの力を、豊かにお持ちなのだと感じました。

まず、山形の小国高校様のおぐまんTシャツですが、本当に凄い発信力だと思います。とてもお似合いで素敵でした。そして、東北初のコミュニティ・スクールを設置されたということで、大きな巻き込み力をこれから発揮して行かれると思います。その成果が、コミュニティ・スクールとして表れているんだろうと思います。

さらに、秋田県矢島高校様。初のコミュニティ・スクールと思っていらっしゃったそうですが、ここに来て2番目だと知った。でも2番目であること自体が素晴らしいなと思います。保護者も職員も地域を共に生きる大人として、というこの一言に、コミュニティ・スクールとしての在り方が全て集約されていることをしっかりと私たちに伝えていただきました。

青森県立板柳高校のPTA会長様。28年間に渡るPTA活動、最後に5女と言っていましたね。5人のお嬢様なのだとビックリいたしました。フランス語のようなお言葉で全てを理解できた自信がないのですが、モントリオールで聞いたフランス語に近く、とても素敵なお言葉でした。世代間交流の場を作り、特に除草作業の前会長様との2ショットはすごくかっこいいと思いました。こんなかっこいい大人たちが次の世代を育てていくんだ、ということを実感させていただきました。

岩手の北上翔南高校様。本当に地道に、そして着実に、具体的、組織的な巻き込み力を実現されていることを痛感させられました。小さな小さな取組みをいくつも重ねて、先程、大沼高校様から質問がありましたが、どうやったら総会への参加率を高めていくかの沢山のヒントが、この高校様の発表の中に埋め込まれていたと思います。特に研修旅行を大学見学に代えたというのは、グッドアイデアだと思います。私も含め、各大学はPTAの皆様をお待ちしております。研修旅行と称してキャンパス訪問をいただければ、たとえ東北大学でも喜んでお迎えすると思いますので、是非、この企画を今日盗んでお帰りになれたらいいかと思いました。

また、福島県の喜多方桐桜高校様からは親以外の大人との出会いを作る、そういう機会作りに尽力いただいていることがわかりました。残念ながら、思春期の子どもたちにとって一番目障りなのは親なのです。なぜなら生物学的にそうなのです。ですから、私はいろんな高校で思春期の発達課題について話をさせていただく時、君たちは心理的親殺しが始まっているんだよというところから紐解いて、性感染症やSNSの問題に踏み込んで行きます。よそのおばさんだから話を聞いてくれます。親からは大切なメッセージが届かなくなってきています。でも、ご発表にあったように、彼らはちゃんと親の生き様や背中を見て、自分がどんなにかっこいい大人になったらいいかということを学んでいます。

そして最後に、質問が集中しました、80%を超える総会への出席率を誇られている宮城県の志津川高校様。この取組がどれほど私たちに勇気と力を与えてくださることか。地域に学校が無くなったらどうなるのでしょうか。私たちの心の中心部が欠落していくような気がします。学校が私たちに与えてくれるもの、それは人格形成の核です。小中高その中で子どもたちが培ったものは、生きていく時の芯です。それを志津川高校様が的確に表現され、いつか帰っておいでよという暖かいメッセージと共に、ここで学んだことの意味や価値を高校生たちに、その親に伝えていることが良くわかりました。そしてその背景に私たちが共有したあの震災の記憶があるのだ、ということも改めて痛感いたしました。

メメントモリと言います。「死を見つめて」、最初の和合先生の詩にもありましたが、私たちは人生で今、一番若い時を生きています。明日は1日死に歩を進めて行きます。常に死に向かって生きている訳です。そのことを痛感させてくれたのがあの震災でした。それを通じて逆に、人として何が大切なのか、生きることの意味や価値を改めて学んだような気がしてなりません。

開会式の御挨拶で、PTA活動は何のために誰のためにあるのだという問いかけがありました。もちろん子どもたちの最善の利益のためです。でも、その子どもたちを守るために私たちは大人として何ができるか、地域は、学校は何ができるか、それを6校のPTA活動の発表の中から豊かに学ばせていただいたように思います。

発信力と巻き込み力と協働力を持った本物の大人との出会いなのです。そしてこの本物の大人が実は反発しているようでいて、子どもたちにとって自分の親と信頼関係があれば、しっかり耳を澄まして話を聞いてくれます。PTA活動の意義や価値というのは、実は我が子にとって必要なことを全ての子どもたちに共有することによって、自ずとわが子に伝わっていくという、その地域が持っている教育力の再生です。今日、その6つの場面に立ち合わせていただけたことを心から感謝します。

ある発達心理学の専門家が言うております。「子どもの幸せはその子の成長を喜ぶ大人の数に比例する。」今日、お集りくださった私たち一人一人が、私たちの子ども一人一人の幸せや成長を願うことによって、この地域、そこに生きる子どもたち一人一人が、次の世代を担う私たちのようなかっこいい大人になるために生まれているんだ、ということを実感させていただけた時間でした。

この勇気を糧に、私も福島市という小さな町の学校に喜んで来てくれる若い学生たちと、共に学び続けて行きたいと思います。本当にありがとうございました。

コーディネーター



福島県高等学校長協会会長・
福島県立磐城高等学校長

阿部 武彦

研究協議の発表全体をとおして、東北全体が抱える少子高齢化等の状況の下、各高校ではいかに活性化しながら存続、維持していくかという大きな課題に直面していることを、改めて感じたというところでございます。

ただしかし、高校生、子どもたちの眼差しの深さ、高さは、限りない可能性を秘めていると確信しております。昨日の情報交換会でも、あさか開成高校のフラダンスの子どもたちもそうでしたが、これから発表がある塙工業高校の和太鼓、そして日本一の郡山商業のチアリーディング部、さらに楽都・郡山が誇る音楽の発表をする生徒の眼差しを是非ご覧ください。この眼差しこそが、私たちが繋がる力であります。この力を支える保護者の皆様、教職員でありたいと心から感じております。



大会スナップ(4)



講演



スポーツの力 ～子どもたちの未来に向かって～

筑波大学体育系教授

山口 香氏

□ごあいさつ

ようこそ福島へ。私、福島を代表しているわけではございませんが、母が喜多方市の出身でご縁があり、このような形で福島県に呼ばれてお話をさせていただくことは非常に光栄です。特に今日は高等学校PTAの東北大会ということで、県外からも多くの方がお集まりの中、お話しする機会をいただき大変うれしく思っております。

今日は「スポーツの力」というお話をさせていただきます。高校のPTAというと私より若い方が多いと思いますが、私のことを知っていますか？（笑）。私は試合に出始めたのが13歳ですから終わるのも早く、引退が平成元年。あれから30年。紹介の時「皆様よくご存知の」といわれるのですが（笑）、知らないと言うよりは忘れていています。高校にも頼まれて行くのですが、このおばさん誰（笑）。柔道で入ってくる大学生も知りません。帰ってお母さんに聞け（笑）、という感じです。私は体型をみると柔道なの？といわれるのですが、昔からこんな体型でした。現在の柔道はほとんどの試合が体重別です。昔は大きい人が強かったというイメージがありますが、体が小さくてもチャンスがあるのが柔道です。今はスポーツ全体にも関わっており、オリンピック2020の仕事もしていますので、今日は柔道の話もしますが、スポーツ全般の話もさせていただき、皆さんの子育てあるいは学校との関わりとか、何か参考になることをお話できればと思っております。

□嘉納治五郎先生について

柔道を創られたのは嘉納治五郎という方です。あの「姿三四郎」のお師匠さん、矢野小五郎。そのモデルが嘉納治五郎先生です。柔道は嘉納先生がゼロから創ったものではなく、何からかという柔術。昔は武道と呼ばれるものは武術と呼ばれていました。剣術、弓術ですね。それを「道」という言葉に置き換えたのが嘉納先生です。なぜ「術」を「道」に置き換えたかということ、先生も柔術を若い頃習われました。先生は頭がいいだけでは人はついて来ない。腕っぷしも強くなければ人は言うことを聞かないと柔術を習い始めました。そしてやっているうちに自分が変化していくことに気づかれた。技も体も鍛えられていくけれど、一番変わったと思ったのは「心」です。自分をコントロールできるようになったと感じたのです。先生は怒りやすく、喧嘩っ早く感情をコントロールできないところがあった。でも柔道を通して自分の気持ちを抑え、攻めに行く時と守る時、考える時というふうに、自分自身の感情をうまくコントロールできるようになった。これはとても素晴らしい日本の文化だと。

ただ、時代は明治です。武術が切った張ったじゃないだろうという時代です。でも、柔術にはいいものがたくさんある。若い人たちがそれを学ぶことで成長できると思われた。ただ、「術」という字はだめ。なぜかという「術」は技術を学ぶことで、相手をやっつけることを一番の目的にしていた。これからは「術」という字を「道」に変え、技術を学ぶことを手段として人を育てる人間教育を目的にしよう。ということで「道」という字が使われたのです。今は剣道、弓道すべて「道」という字を使いますが、最初に「道」という字を使ったのは嘉納先生です。この人づくりという精神が世界に発信されて共感を得、今柔道は200を超える国や地域で行われ、オリンピック競技にもなっています。

嘉納先生はそうのように講道館柔道をはじめられ、アジア初の国際オリンピック委員でもありました。柔道とスポーツ、特にオリンピックの精神には共通することがたくさんある。競い合うことによって敵をつくるのではなく友をつくる。ルールの中で競い合うことによってお互いをわかり合い、高め合って、いい国を、いい世界をつくっていかうという共通の理念があるということであり、柔道、スポーツを通じた人間教育を提唱されました。



柔道の目的を嘉納先生は二つ挙げられています。これから2020東京オリンピック、パラリンピックがやってきます。オリンピックに出たい、何とか頑張りたいという子どもたちがたくさんいます。私もそういう気持ちを応援したいと思います。でも、その先にあるものを私たちは考えなければいけない、というところを嘉納先生は言っているのです。柔道の目的は二つ、「自己の完成」と「世の補益」ということをおっしゃっています。

どういうことかという、嘉納先生は試合を否定していません。試合で勝ち負けを競うことは非常にいい、でもそれがすべてではない。では何がいいかという、緊張すること、自分を試す機会、そこでうまくいったかどうかは反省につながるのです。今回のロシアワールドカップを見てもわかると思いますが、一つ一つ

勝ち上がっていくことで彼らの心と体に変化し、そして成長していくさまが見て伝わってきました。これが勝負の良さなのです。

私もオリンピックに出た時には、自信があっても足が震えます。うまくいくこともうまくいかないこともある。だから「学び」があるのだと。勝っておごらず、負けてくさらず。つまり、勝ったから得るものがある、負けたから得るものがないというのではなく、やったことに対して、うまくいった、いかなかったを持ち帰って次の進歩につなげる。自分を試す場にきなさいということなのですね。そういう場をたくさん経ることで自分自身が少しずつ成長していくことを、嘉納先生は柔道に求めたわけです。

ですから、武道全般勝ち負けではないところに評価をおいています。柔道は段位制度、最高段位が十段です。オリンピックで活躍する選手たちは、五段から六段。女子は四段、五段ぐらいです。つまり真ん中です。世界一を目指す人たちでも、修行の過程ではまだ真ん中なのです。私は七段でございます。八段までは実力でいけますが、九段、十段になると講道館館長の専権事項で、館長が君に与えると言わないといただけません。では七段がオリンピック代表とやったらどうなるか。まあ、3秒立っている自信がありません(笑)。

では、なぜ私の方が段位が上なのか。ここが嘉納先生の「自己の完成」なのです。柔道というのはそれを通じた人間の教育なので、技術がうまくなる、強くなるだけではなく、それを生かして社会で貢献する「世の補益」なのです。世の中のためになる人間になりなさいというのが目的なので、柔道をやってきた心と体の強さを生かして頑張っている人は、それも修行なのだということなのです。指導すること、社会の中でいろいろな活動をするのも、ボランティアもそう。そういったことを含めての「世の補益」なのです。

私たち柔道指導者が間違っていないのは、オリンピックチャンピオンが最終的な目的ではないのです。人生は長いわけですね。その先に、そこで得た経験を生かしてどのように世の中のためになる人間になるかを見据えて指導していかなければならない、というのが嘉納先生の教えであるわけです。

□スポーツを通じてどんな人間をそだてたいのか？

では、スポーツを通じてどんな人間を育てたいのか。オリンピックやメダルの先にあるもの、スポーツの意味とか価値というのは何だろうということです。まあ、若い人たちはそこまで考えていない。私が若い時もそうだったのですが、今思うのは引退した後の方が長いということです。「ヤワラ」ちゃん、谷亮子さんが出てきてからの私の忘れられ方はひどかった(笑)。もうあつという間です。今日だってつくば市から東京に出て新幹線に乗って来ましたが、誰一人気づかず平和です。日本という国はオリンピックでメダルをとろうが、何もしてくれません。終わった途端、肩をたたかれてご苦労さん、あとは自分で頑張れ。秋田犬もきません(笑)。

だからこそ大事だと思うのは、人生のピークがオリンピックやそこでメダルを取ったことで、ずっと思い出だけで生きていくのはさみしいではないか。そこで得られた経験を持って、その後どうやって生きていこうか、どうやって生かしていこうか。というふうに見てもらいたいです。そういう子どもたちを育てていきたいと思うのです。

□私が考えるスポーツで「人を育てる意味と価値」とは

オリンピックのメダル、そしてその先にあるものは何だろうということを考えてみます。スポーツで人を育てる意味とか価値というのは何だろう。その先にあるもの、何を学ぶんだろうということを考えてみたいと思います。

自らを律する力

ゴルフはイギリスで生まれたスポーツですが、ゴルフを通して何を教え、何を学ばせたいのか？ゴルフは自らを律する力を学ぶのです。引退してから、「山口さんもゴルフやった方がいいですよ」と誘われ、コースデビューしました。根拠のない自信。ゴルフってボール止まってるんだし。当たらないわけないと思ってコースに出ました。おわかりですね(笑)。二度とゴルフはやるまいと。

何度か打ってやっとグリーンにのせたと思ったら、みんな待ちくたびれて。もうちょっとやらせてといて、それで沈めて。ゴルフの重要なところはここからです。自分が何打打ったかを数えて、スコアブックに記入しなければいけない。ここです。あの右にそれた時、あの切り株の辺で私は何打打ったのかと振り返らなければいけない。振りかえる時、私という人間が試されるのです。誰も見ていない、監視カメラもないのです。

あの時、私が素振りと言えば素振り、空振りと言えば空振り。つまり、善悪の判断を自分が決定しなければいけない。いくらでも誤魔化すことができる。だから人を創るためのスポーツなのです。

ゴルフはイギリスで生まれたエリートスポーツです。エリートとはどういう人間でなければならないか。つまり、上に立つ人間が何を求められるかといえば、人に見つからないから悪いことをしていいものではない。人が見ていようと見てまいが善悪は自分の良心に従ってきちんとコントロールする。良き行いは積極的にするというのがゴルフなのです。大きな大会になれば当然レフリーがいます。でも選手自身もちゃんとスコアを書きます。審判のスコアと見比べて選手の方に誤りがあればペナルティになります。そのつも



りはなくても誤魔化したことになる。ゴルフは珍しいスポーツで、ルールブックの前にマナーブックがあります。人としてどう行動すべきかということが書いてあるのです。スポーツをすることによって学んでいく一つの例でございます。

自ら立つ力

それからテニス。錦織選手。ウィンブルドンが始まりました。テニスを見て感じることは、ゴルフは自分を律すると書いて「自律」ですが、テニスは「自立」です。なぜかという、テニスは監督やコーチがテニスコートにいないのです。錦織選手を育てているのはマイケル・チャンという優秀なコーチですが、そのコーチも観客席の遠いところから見ているのです。錦織君はたった一人でコートに立って、どうするか判断をして闘い抜くわけです。これがまた、スポーツの良さであります。大事なのはここです。スポーツの良さは、どんなに小さな子どもでも勝つか負けるかして帰ってくるまでは自分の責任で闘う、つまり「自立」なのです。何ともしやれないのです。それを学ばせるのがスポーツなのです。

コーチ時代、選手に言い過ぎはダメなんだと思ったのは、ある時、柔道には大外刈りという技がありますが、私の選手もそれが得意だったので、「大外刈りにいけっ！」と何度も言ったのです。すると選手は、いかないで負けたら恐ろしい。とりあえずと技を掛けたんです。中途半端に。掛けたら返されて一本負け。帰ってきて選手が泣くんです。「次頑張れ」ってやさしく言ったんですよ(笑)。そうしたら、選手が下をむきながら「だって先生が大外刈りって」と。失礼しちゃいますよね(笑)。確かに私は言った。けれども、最後に決めるのはあなただから。

私は責任逃れをしているのではなく、これを選手や子どもたちに教え込まなければダメだと言っているのです。指導者や親も良かれと思って言うのです。何で言えるか？見ているからです。やっていないからです。今回のサッカーのポーランド戦の最後のパス回しについても、言うのは簡単です。自分が責任取らないから。でも、最後に決めるのはそこで闘っている選手なのです。私が監督になってわかったのは、自分がやっていないと相手が弱そうに見えてしょうがない。やっていないから。でもそれが「見てる」ということなのです。



あらゆるスポーツにおいて、最近は親御さんの熱が半端ない。特に力が入っているのはお母さん。あのワゴン車。子どもの応援に行くのに最適です(笑)。おじいちゃん、おばあちゃん、みんなピクニックにでも行くのかって(笑)。行く時はいい。頑張るんだよ。勝ったらおいしいもの食べさすからと。試合に出れば勝ち負けがつきます。負けて帰る車の中は地獄です(笑)。例えば野球。「あのね、お母さん野球はよくわからないけど、何で振らないの？お母さん野球知らないけど振らないと当たらないっていうのはわかるの。見送りの三振ってどういうこと？」とか言うのです(笑)。

でも、子どもは賢いのです。ここで一言返せば、三言、四言返ってくるのを知っています(笑)。嵐がきた時は寝たふり。過ぎ去るのを待つ(笑)。99.99%の子どもは、「お母さんできんのか。やったことあんのか？バット持ったことないだろう。言うのは簡単だよ」と思っています。子どもの考えが正しいのでございます(笑)。

私が若い選手たちにアドバイスするのは、「親や先生のアドバイスは非常に大事だから聞かなきゃいけない。でも、最後に決めるのはあなたでなければならない。なぜ大事かという、自分は全部見ているつもりでも、当事者はすごく狭い範囲でものを見てしまい、目の前のことしか見えなくなる。親や指導者は少し離

れたところから客観的に見ているから、良いことを言ってくれることもある。だから、それを一回自分の中に入れてアウトプットする。そして、その時には自分でこうしようと考え、プレーに移さなければいけないよね」と言います。

まさに錦織選手がそうです。ゲームの間にベンチに座って汗を拭き、自分のプレーを振り返ります。コーチが言ったことを頭に入れ、次はどういうプレーにしたらいいか、うまくいったこといかなかったことを点検して次の行動に移す。これが早くできる人間ほどいいプレーができます。修正力。終わってから一瞬にして次の判断につなげる。この訓練なのです。

でも、それを親や周りの人から言われると考える機能がなくなり、言われたことをやるのが精一杯になってしまう。ですからこの余裕を少し残してあげることが必要で、何よりスポーツというのは自立させる、自分で判断、決断する力というところに意味があるのだ、そこを私たちは考えなければなりません。

社会の仕組みを学ぶ

そしてラグビーです。来年、ワールドカップが日本で行われます。私が勤める筑波大学は国立としてはまあまあ強い方なので、私も時々ラグビーを見にいきます。

ラグビーもイギリスで生まれたスポーツですが、何を学ばせたいのかというと、社会の仕組みを学ぶのです。ラグビーを作った人は変わっています。あのボール。どこに行くかわかりません。また、ラグビーは前に向かって走っている人にパスをしたら反則です。後ろを走っている人にパスしなければいけない。進んでいるのか下がっているのかわかりません。そういう時、私のような性格の人間が、ああ面倒くさいと一人で走るんです。そうすると、2人3人は抜けますが、敵も3人がかりできて潰される。潰されるとボールを前に落とす、反則ですからまたスクラムだのわけのわからないことになって、なかなか点数が入らないのです。



私はラグビーを見て反省しました。ラグビーはまさに社会の縮図だと。自分が正しいと思って突っ走っても一人でいくと潰される。だから、面倒でもお隣同士パスをつないで仲間を作りながら前に進む。それが世の中なのだ。私は今まで自分が言ってきたことは大体正しいと思っています。しかし、自分だけで突き進んではいけないのです。仲間を増やし理解者を増やして、みんなで少しずつ進んでいく。これが世の中であり民主主義なのです。貴乃花親方にもラグビーを学んでいただきたい(笑)。

ラグビーには「One for all, all for one.」という有名な言葉があります。まさに社会のあり方ではないでしょうか。それを親が子どもに言っても「わかってる」で、言うことを聞きません。学校の先生もいいこと言うのですが、子どもはだいたい聞かない。でも、スポーツを通して、反則したらレッドカードなんだよ。レッドカード出たらみんなに迷惑がかかる、だから反則しちゃいけないよね、ということを学んでいく。だからスポーツには意味も価値もあるということなのです。

スポーツというのはスポーツだけがあるのではなく、社会を映す鏡です。だからこそ、スポーツで起きている暴力の問題であったり、体罰、あるいは男女差別の問題は、社会の抱える問題です。社会の抱える問題に、もしかしたらスポーツから見ることによって、スポーツから子どもたちを育てることによってアプローチできないだろうか、スポーツから解決できることがあるのではないか。ということを私たちは考える。だから、スポーツを若い人にやってもらいたいと思っているのです。

体罰や暴力はなかなかなくなりません。でも、スポーツから学ぶということを考えたら、子どもたちに「ルールを守って」と言えます。では、子どもたちにルール守れと言っている先生方が、早く強くしたいか

ら殴っちゃいました、蹴っちゃいました。これはだめですね。強くしたい気持ちはあるかもしれませんが、一足飛びに競技力は上がりません。我慢して我慢して強くなっていく。そういうことを指導者も共有しながらやっていくことが必要だと思っています。

□時代が変われば、求められる人材、能力も変わる

この大会のテーマ「心豊かなたくましい人づくり、変化に対応し未来を拓く力を」は、まさに私が今日お話ししようと思っていたことです。時代が変われば求められる人材や資質、能力も変わります。子どもたちが生きている現代、これから子どもたちが生きる未来は、このテーマにあるように変化が激しく、予測ができない社会です。私や皆さんが育ってきた社会とも大きく様変わりしています。ではそこで求められる資質、能力、どんな人間が必要とされるのかということをお私たちは考え、教育に当たっていかねばならないと思います。



私が生まれたのは1964年、東京オリンピックの年です。この時代のスポーツは我慢と根性。『巨人の星』です。星飛雄馬、星一徹。大リーグボール養成ギブス。今なら児童虐待です(笑)。でも、昔はこれがよかった。私は女の子でしたから『アタックNO1』。コーチはボールという武器で顔にバンバン当てるし、取れないところに投げて、何で取れないんだ。主人公の鮎原こずえ、「苦しくったって、悲しくったって」、大好きでした。私もこれがスポーツだと思って柔道をやりました。

今考えるとひどいことで、水を飲んだら弱くなると言われ(笑)、また、昔はどのスポーツもうさぎ跳びでした。今の選手は浴びるほど水を飲んでます。昔のピッチャーは肩を冷やさないよう海水浴も行かなかった。ところが今の選手は終わった途端に氷づけです。いろいろ変わってきているのです。その変化についていくのが大変です。

私の両親も寝ずに働いて家族を食べさせ、豊かにしてくれました。豊かになったと思ったのは、家に電化製品が増えていくことでした。洗濯機も今は全自動だとかドラム式、テレビが白黒からカラーになり、炊飯器はガス釜から電気釜になって、「もうすぐご飯が炊きあがります。」聞いてないですよ私(笑)。でもそういう時代になってきたのです。

私が生まれた時代とはスポーツだけでなく全部が変わってきて、我慢と根性が必要なのは今はロボットです。ロボットは文句を言いません(笑)。ただ、人間にもいつの時代でも我慢と根性が必要です。でも、それだけでは人間としての力を発揮できない。もっと人間にしかできないことがあるだろう、という時代になったのです。

スポーツは『巨人の星』から『キャプテン翼』になってしまいました。顔つきが違います。歯は見せちゃだめ、食いしばるんだと教わったのです。私たちは(笑)。オリンピックに行く選手は何と言うか? 「楽しんでほしいと思います。」ふざけるな(笑)、死ぬ気でやってこいと言いたいんです。私は(笑)。でも、それは言っただけでダメな時代になってしまった。それは何故かといったら、時代の変化です。

では、今の選手たちが頑張っていないかという、みんな頑張っています。私たちの時代よりも力は向上しているし、頑張りに差はないのです。ただ、そこに向かう姿勢が違うということなのです。私たちの頃は、叩かれて叩かれて、這い上がってきた時代でした。でも、今の子どもたちは目的を与えてあげれば、自分が夢見たことに、言われなくても頑張れる世代になってきているのです。キャプテン翼になったのです(笑)。

あのワールドカップの舞台にいたらどんな気持ちなのか、どんなプレーができるのだろうか。そのワクワク感のために努力もしよう、頑張ろうという気持ちを持てるのです。殴られて、やれと言われた世代ではない

んです。楽しんでくるなんてふざけるなと思うのですが、でも、それを言ったら、彼らが持っている力の芽を摘んでしまう可能性があるのです。もう違うんです。

皆さんスマホをどれくらい使いこなしていますか。私は説明書世代で、最近は何を買っても説明書がないのに慌てます(笑)。今の子どもたちは説明書なんか見ない。開けたら触る、やってみる。ムカつきますよね(笑)。でも、それが生きてきた時代の違いなのです。脳がそういうふうになってきているんです。感性が先ですね。そういう意味では今の子どもたちには力があると思います。私たちにはなかった能力です。発想力ですね。論理立てて考えることは、逆に今の子どもたちは苦手かもしれない。でも、ひらめきや発想など、感性のところは今の子どもたちが優れていると思います。



そういう子どもたちを私たち大人がどう育てるかという、今持っている力をどう伸ばしてあげるかなのだと思います。私たちの時代の考えを押しつけようとすると、潰してしまう可能性があります。我慢と根性を身につけさせたい。でもそればかりではダメですね。ゼロから何かを生み出す発想力、イノベーションですよ。今から開発されるもの、発見されるものというのは私たちが思いもよらないものなのです。そういう発想力をつけさせさせるために、私たち大人は子どもたちの可能性を潰さないようにする。

世界で突き抜けるのは強い個性です。私の周囲にいるチャンピオン、メダリストたちは全員変わり者です。私は違います(笑)。先日、羽生結弦選手が国民栄誉賞を受賞しました。素晴らしい、ですが変わっています(笑)。私も同じくらいの息子がいますが、くまのプーさんのティッシュケースを持っていたら注意しますよ(笑)。でも、これが突き抜けるということなのです。羽生君がやったらトレンドになるんです。サッカーだと本田圭佑君、彼も変わっています。有名になればなるほど反応を楽しむぐらいの人間でなければ、世界を突き抜けるところにはいかない。だから、子どもの夢を摘まないために、私たちは自分の価値観を抑えながら、子どもたちの能力を認めてあげるといふふうに変っていく必要があるということです。

□人を育てるコーチングとは？

私の専門分野、人を育てるコーチングについてお話しします。皆さんに作業をしていただきます。「みる」という意味の漢字を思いっただけ書いてください。

見 観 瞰 占	視 診 覧 賭	監 看 視 胥
------------------	------------------	------------------

コーチングとは、相手の中にある答えを気づかせたり、引き出したりすること。
ティーチングとコーチングの併用が大事

どうしてこんなゲームをしたかという、ここに書けない字はあっても、知っている字ばかりですよ。でも出てこなかった。ここがコーチングなのです。ティーチングとコーチングの違いは、わからない漢字を教えるのがティーチング。教えて技術を身につけさせるのです。コーチングというのは、そもそもその中にはある、でも、そのことに気づいていないから気づかせ、引っ張り出してあげることです。教えて育てる。コーチングは育てる。みんなやる気はあるのです。そのやる気を引き出してあげる、それが私のやっているコーチングなのです。

コーチがチェックしたいポイントは、考えさせるコーチをしているかです。「考えろ、お前たちで考えなきゃダメなんだ。考えろ！」というのも大事です。でも、考えろと言って考えるのなら犬でも考える(笑)。考えさせる環境を作ってあげるのがコーチングなのです。

では、どのように作ってあげるのか。私が若い指導者に言うのは、いい質問をしているかということです。人間の頭はクエスチョンアンドアンサーなのですね。そのシチュエーションを与えれば自然と考えます。例えば試合で負けたとします。優れた指導者であれば、あの時なんでああいうことになってしまったんだろうね？誰がどう動いたらよかったんだろうね？と言う質問をする。そうすると選手は考えるんです。振り返るんです。何であそこでああなってしまったか。正直どんな名将でも答えはないんです。

スポーツの大事なところは答えがないところです。いくら私が優秀な監督でも答えを授けることはできません。でも、どうしたら良かったのかな？この場合はどうなの？という良いクエスチョンを与えていく。すると選手は考えます。僕だったら、あの時こうすればと、それらをシミュレートしていくと自問自答できるようになる。

サッカーの西野監督がどんなに優秀でも、あそこで叫んで指示が間に合うかという、もうボールは違うところに行っています(笑)。あのピッチに立っている選手が瞬時に判断しなければいけない。その訓練を私たちはしているのです。自分でクエスチョンを出して、自分で答えを導き出す。まさに錦織君の「自立」です。

そして、学ぶ姿勢や柔軟性です。私が生きてきた時代はこうだったと押しつけると、子どもたちは必要なことを学べなくなります。自覚しなければならぬのは、昔を生きてきた私たちです。未来を拓く子どもたちを育てようと思ったら、私たちが柔軟な考えを持って子どもたちを指導できるか、私たちが社会に順応していけるかが求められるのです。自分の夢を選手に押しつけていないか。大事なのはここなのです。

私は、筑波大に入ってくる柔道の選手はみんな強くなりたいたいのだと思っていました。しかし、強くなるのがすべての子どもたちの夢ではないのです。柔道部で楽しくやりたい、指導者を目指したい。必ずしもトップになりたい子だけではない。みんな強くしようと思うのは、私の夢に過ぎません。子どもたちは自分たちの夢を持てば、キャプテン翼のように輝けるのです。子どもたちが夢を見つけられる環境をどう作ってあげるか、話を聞き、やらせてあげ、挑戦させてあげる、私たちはそういう気持ちを心のどこかに持っていないといけないと思います。

残り3分という表示が出ましたから、ここからはパッといきますよ(笑)。



□コーチがチェックしたいポイント

そして指導者は、選手は自分の思い通りにならないという前提を持っているか。自分が子どもを持ってわかりましたが、生まれてこの方育ててきたのに何の言うことも聞きません。自分の子どもでさえ言うことを聞かないのに、他人様の子が言うことを聞かざるがいないと思います。同じく育てても兄弟姉妹はまったく違います。一人ひとり個性があるということです。

苦言を呈してくれる人がいるか、自分のことが見えないお山の大将にならず周りの意見、この人の言うことだったら聞けるという人いますから、そういう人がいるかどうかも大事です。

□コーチ(親、大人)の責任、そしてできること、コーチには選手を変える力がある

選手も子どももそうですが、みんな純粋に親に褒めてもらいたい、認めてもらいたいと思っています。その背中を押せるかどうかなのですね。時には怒ってあげることも必要でしょう。大事なことは指導者や親、大人は子どもたちを変える力を持っているということです。その力を私たちがうまく使って、子どもたちを

伸ばしてあげることが必要なのではないかと考えています。浅田真央選手を育てた佐藤コーチ、素晴らしいなと思います。

□平昌五輪カーリング女子チーム吉田知那美さんの言葉

平昌オリンピックで私が一番感動したのはカーリングチームです。次生まれたらカーリングをやりうと思います。柔道にはモグモグタイムなんかないです(笑)。カーリングの吉田さんが北海道の常呂町で言った一言。「この町、何にもないよね。小さい頃はこの町にいたら夢は叶わないと思っていた。でも、今はこの町でなきゃ夢は叶わなかったと思っています。」自分が生まれ育った町で、そう言って欲しいですね。

家庭に置き換えてもそうです。お父さん、お母さんがいたから自分はこんな夢に挑戦できた、この学校に通ってチャンスを与えてくれたからぼくは成功できた、僕の夢は叶ったよ。そんな環境を、私たち大人は創っていきたいと思います。

□You touch the future (我々は選手の未来に触れている)

ヨーロッパサッカー連盟(UEFA)の指導者を招いて講演をお願いした時、「You touch the future」「私たちは選手の未来に触れているんだ、今日あなたがかけた一言が子どもたちの未来につながるんです。あなたの一つの行動が子どもたちに勇気を与え、夢を助けて成長に役立つんです。だからあなたの役割は大きいのですよ。」と話してくれました。まさに私たち大人がこの言葉を胸に刻み、子どもたちにチャンスと夢を与え、大きく羽ばたいて欲しいと思います。

2020年はあっという間にやって来ます。その前にはラグビーワールドカップもございます。たかがスポーツ、されどスポーツです。スポーツはスポーツでしかありません。けれどもスポーツから伝えられるメッセージもたくさんあると私は信じています。これから柔道はもちろんですが、スポーツを通していろいろなことを発信しながら、子どもたちの成長に役立つ活動を続けていきたいと思っています。

今日お集まりの皆様方も是非、今日の話の中から一つでも、何か心にとめていただいて、明日からの子育てに役立っていただきたいと思います。

ご静聴ありがとうございました。



質疑応答

Q：宮城県仙台第三高等学校 本間秀子

我が子にはゴルフもテニスもラグビーもさせたいと強く思いましたが、高校に入学して、運動部の盛んな高校なのですが、選んだのは音楽部でした。学校の先生方が、部活動を一生懸命やる子は3年生になって伸びるといのは、私も山口先生と同じ時代を生きてきましたのでわかります。でも、今の若い子は新人類のようなのです。体育会系じゃない音楽部の我が子に、直接やらなくても、スポーツの良さをどのようにしたら教え、あるいは体験させることができるかと思っているのですが、アドバイスをお願いします。

A：山口 香

私は、小さい頃音楽に触れることがなかったので、子どもには無理やりピアノをやらせました。「お母さんの夢」を押しつけました。大変不評でしたが(笑)、正直、音楽でも何でもいいのだと思います。柔道は「道」と書きますが、「道」の文化というのがあるのです。華道、茶道、書道すべて同じ考え方です。つまり、何をやるかが大事なのではなくて、スポーツであっても音楽であっても、大事なのはそのプロセスを学ぶことだと思います。どうやって自分が成長していけるかを、仲間とどうやって連携していくのかということ、音楽を通して学んでいけば必ず力にしてくれると思います。

みんながスポーツをやらなくても全然かまいません。ただサッカーのワールドカップぐらいは見るようになっていただけると話も合うかなと思いますので、そこは親が誘導してください。そして、それが音楽にも返ってくると感じていただければいいと思います。

吹奏楽部は隠れた体育会系と言われています(笑)。音楽も厳しい世界ですから。決して体育会系に劣らず学ぶこともたくさんあると思います。是非頑張るようにお伝えください。



閉会行事

次期開催県あいさつ

山形県高等学校PTA連合会会長 **細谷 隆良**
第68回東北地区高等学校PTA連合会山形大会実行委員 **安食 克彦**
同 **千葉 義彦**

皆さんこんにちは。郡山大会の最後に貴重な時間をいただきありがとうございます。福島県高等学校PTA連合会の石川会長、樽川実行委員長をはじめとする大会関係者の皆様、心温まるおもてなしと、この素晴らしい郡山大会を本当にありがとうございました。

来年の山形大会は7月4日、5日に行われます。この大会で拝見させていただいた高校生の皆様の素晴らしいパフォーマンス、そして只今聴かせていただいた郡山7校の合同合唱、本当に感動いたしました。この大会で勉強させていただいたことを生かして、東北の教育のために、子どもたちのために、山形県の仲間たちと共に精一杯努めさせていただきます。

山形と言えば日本一の生産量を誇るさくらんぼ。そして、そば、さらに肉。米沢牛、山形牛、三元豚もごございます。そして、もちろんおいしい地酒もごございます。昨日の夜、今日の昼の駅弁も絶品でした。しかし、山形にも芋煮とかどんどん焼きとか、おいしいものがたくさんございます。

来年の7月4日、5日、皆様のお越しを心からお待ちしております。きてけろなー。

閉会宣言

郡山大会実行委員長 **樽川 啓**

最後までおつきあいいただきましてありがとうございます。

本大会で皆様の中に何か気づき等ございましたらうれしく思います。私自身、高校生の皆さんのパフォーマンスを見て心を動かされてしまいました。本当に子どもたちの可能性を引き出せる親でありたいと思った次第でございます。

また、大会開催にあたり御尽力いただきました皆様に、この場をお借りして御礼申し上げたいと思います。本当にありがとうございます。

以上をもちまして、第67回東北地区高等学校PTA連合会郡山大会を閉会いたします。

第67回東北地区高等学校PTA連合会 郡山大会 参加者数一覧

	一般参加者	受賞者	合計	情報交換会
青森県	172	5	177	141
岩手県	200	2	202	55
宮城県	248	5	253	69
秋田県	89	3	92	85
山形県	127	2	129	112
福島県	676	3	679	155
来賓等			7	9
合計	1,512	20	1,539	626

編集後記

梅雨空に紫陽花が映える頃、第67回東北地区高等学校PTA連合会郡山大会が開催されました。スタッフTシャツのブルーに白の音符のワンポイントが、さわやかに「楽都郡山」をイメージさせてくれました。

平成29年度、矢部浩樹会長のもと準備委員会を発足させ、今年度は石川直哉会長、樽川啓実行委員長指揮のもと、県南地区の高校30校、約350名の保護者、教職員の皆様のお力添えを得て大会を実施、成功裏に終了することができました。

著しい変化に対応しなければならないこの時代に、力強く未来を切り拓いていける子どもたちを育てるには、親として指導者として何ができるかが大会のテーマでした。

大会オープニングでは、詩人・和合亮一さんの力強い詩の朗読に会場の人々は引き込まれ、各県からの研究発表では、地域に根ざし、すばらしい成果を挙げているPTA活動が紹介されました。昼休みの高校生発表の華麗なチアリーディングと迫力ある和太鼓の演奏はいずれも圧巻でした。

午後の山口香先生の講演では、最後の「You touch the future」ということばから、私たちは親として指導者として、子どもたちといかに接するかという心構えを教えてくださいました。

フィナーレの郡山市内高校の合同合唱・管弦楽団による演奏は、会場を拍手の渦で包み、参加者の皆さんの心に癒しと感動、そして未来への希望を与えてくれたに違いありません。

東日本大震災から7年、東北地区はまだ復興の途上にあります。しかし、この大会に参加された皆様は、東北の人々の底力、情熱、思いやり、優しさ、東北というまとまりを実感されたのではないかと思います。

紙数に限りのある中、大会報告書としてこれらを少しでもお伝えできるよう努めたつもりです。編集にご協力いただいた皆様に感謝を申し上げますとともに、東北地区高等学校PTA連合会の益々の発展を祈念申し上げ、さらに次年度の山形県へのエールを添えて、編集後記といたします。

大会実行委員(記録専門部会長)

福島県立あさか開成高等学校PTA会長 川名 有香子

◇ 岩手から福島へ ◇



◇ そして、来年の山形へ ◇



第67回東北地区高等学校PTA連合会郡山大会報告書

編集 第67回東北地区高等学校PTA連合会
郡山大会事務局（福島県高等学校PTA連合会）
〒960-8153 福島市黒岩字田部屋53-5（福島県青少年会館内）
TEL：024-545-3368 FAX：024-545-3402
E-mail：ptarengoukai@h6.dion.ne.jp

印刷 共栄印刷株式会社
〒963-0724 郡山市田村町上行合字西川原7-5
TEL：024-943-0001 FAX：024-944-5977



**第67回
東北地区高等学校PTA連合会
郡山大会報告書**